

第 15 回すばる小委員会議事録

日時：3 月 18 日（火）午前 11 時 00 分より午後 4 時 00 分（JST）

場所：国立天文台 解析研究棟 TV 会議室（ハワイ観測所及びハレポハクと
TV 会議接続）

出席者：有本信雄、岩室史英、臼田知史、片坐宏一、高田唯史、山下卓也（以上三鷹）
高遠徳尚（12：10～、ハワイ観測所から TV 会議参加）
市川隆（ハレポハクから TV 会議参加）

参考人：唐牛宏（ASIAA との MOU 案の項のみ）

欠席者：伊藤洋一、小林尚人、定金晃三、土居守、浜名崇、山田亨、林正彦

書記：吉田千枝

● 次期 SAC 委員決定の報告（委員長）

3/11 の光赤外専門委員会において原案通り承認された。

● 戦略枠審査

前回の SAC での議論を元に作成した審査報告書の内容を検討し、改訂を加えて最終版とした。

・ 装置の性能評価について

評価委員は装置の評価ができる人であると同時にこれまでの戦略枠の議論を理解している人であることが望ましい。

PI がサイエンスの実行が可能になったと判断した段階で SAC に報告してもらい、直ちに評価委員会を招集する。

・ 中間審査について

中間審査は SAC が行う。

PI には SAC の審査報告書と TAC によるサイエンス審査の報告書の両方を返す。またすばるのウェブに SAC の審査報告書を置いてコミュニティへの報告とする。

● 国際協力の進捗状況

プリンストンとの MOU は原稿がまとまったが、事務方への説明のため和訳中。
ASIAA との MOU 初案ができたので問題点がないか SAC として検討する。
来年の 4 月以降に京都で Gemini との合同研究会を開催することになったが、
詳細は来年度の SAC に譲る。

ASIAA との MOU 案の背景がわからないので、起草者の一人である唐牛氏を急遽
参考人として招致した。

以下 ASIAA との MOU 案についての議論：

Q：MOU 締結はこの一度だけになるのか？それとも後からより詳細な MOU を
交わすことになるのか？

A：この一度だけだ。

Q：MOU に含まれない具体的な話はどう進めていくのか？

A：現場レベルで進めている。すでに企画委員会にはこの MOU 案を提出済みで、
第 2 項の台湾側が operation に加わるという部分と 第 5 項の台湾側の
scientific return を NAOJ が ensure するという部分が問題だと指摘された。
ただ交渉を進めてよいとは言われているので、台湾側から問い合わせがあった
場合は、NAOJ は approval process を始めた、と説明してもらってよい。

・第 5 項の ensure an adequate scientific return という表現について

C：科学的成果は本来保証することができない性格のものなので、その表現は困る。

C：monitor（監視）するのはいいが ensure(保証)はできない。monitor だけに
してはどうか？

C：ensure でなく encourage でいいのでは？

C：scientific return でなく scientific activity ではどうか？

C：成果が出るまでいつまでも観測時間を保証しなければならなくなる恐れがある。

C：研究者にとっては論文が出版されることが return だが、予算管理者としては
ワークショップの開催や記者発表など、目に見える成果が必要だろう。

A：台湾の funding agency に対する説明として、この表現が必要とのことだった。
観測時間の獲得が競争ベースに基づくことは第 3 項で明示してある。
MOU 案に関わった当事者どうしは共通の理解に基づいて書いている。

C：将来それをわかっている人がいなくなって、MOU の文面だけが残った時が心配だ。

A：SAC が別紙としてコメントを残しておけばいい。第 5 項の ensure や
(企画委員会が指摘した) 第 2 項の operation という語への懸念は台湾側に伝える。

・共同研究の期間について

Q：共同研究の終了はいつなのか？

A：台湾側は年限を切るのではなく、長い目でみて恒常的な協力をしたい、という考えだ。

C：一応5年という区切りは書かれているが、延長・終了の際の通告期限だけは明示しておいたほうがいい。

・今後の交渉の進め方について

唐牛：NAOJとしてはプリンストン大学との交渉と並行して進める予定だ。

MOU案がまとまれば和訳して弁護士にもチェックしてもらい、機構本部に説明する。台湾側はすでに予算申請をしている。

● 来年度 SAC への引継事項

委員長：

今年度やり残したことはあったか？銀河グループの次期観測装置提案がまとまったことが今年度の成果の一つだろう。来年度以降のSACの戦略を今年度の委員会の最後の仕事として考えたい。ELTについてもっと議論すべきだったと思うが、SACの守備範囲がはっきりしない。ELT, SPICAの時代にすばるをどう使っていくか？我々はすばるを使って日本の天文学を育てていかなければならない。他の大型望遠鏡との協力はマウナケア山頂に限る必要はなく、ほかにも日本人が使いたいと思う望遠鏡はある。自分が使いたい望遠鏡をどんどん使って第一線で活躍する人材を育てていく必要がある。

C：次期装置提案書はできたが、具体的にはどう活用していけるのか見えていない。

C：SPICAとELTはどう進むのか？どちらか一方になるのか両方になるのか？

C：どちらか一方に絞った時点で両方だめになるのが通例だ。

C：ELTの時代に向けてすばるはHSCを製作することで他の望遠鏡に先んじていると言える。

C：だがその先を考える必要があるだろう。HSCが完成した時どう運用していくのか？

C：すばるにとって教育という観点は重要だろう。

C：HSCは戦略枠で運用することになるだろうから、なかなか教育には使えないだろう。

C：共同利用時間の75%は戦略枠以外に残るわけだから、それをどう教育に生かすか

を SAC として議論して発信していく必要がある。

C : VLT がすばるに興味を持っているようだが、先方から正式のオファーが来る前にこちらの戦略を考えたい。時間交換や VLT を使う戦略枠にヨーロッパと一緒に加わることも考えられる。それが学生や PD の交換につながっていくとよい。最近外国に行く PD が減ってきているのではないか。すばる望遠鏡以外でのサイエンスという研究会を実施してはどうか？

・時間交換について

C : Keck との時間交換について、最新の OSIRIS を時間交換装置にするように粘り強く交渉して 1 夜の枠を獲得したにもかかわらず、あまりプロポーザルが出ていないのが残念だ。

C : ワークショップをやるとユーザーのニーズがよく掘り起こせると思う。

C : 今年 1 月に開催した UM には SAC の勧めで Gemini の人に多数参加してもらった。次回は Keck の人を呼んではどうか？

・装置開発について

C : すばるの運用についての議論の中で、装置開発をどうやっていくかという視点が出てこないのが気になっている。大学との連携が不可欠だと思うが、すばるの装置開発をどうしていくかを若い世代に考えてほしい。

C : 具体的な装置案がないまま、装置開発の枠だけを考えるのは難しい。ある時点で具体的に絞って進めるしかないだろう。

C : TMT がハワイに来ることになれば、それにすばるの人たちが関わり、同時にすばるの次期観測装置も製作する、という方向に行くことも可能だと思う。

C : TMT 用の装置を考えるためには、まずすばるに PI 装置を付けやすくしてもらいたい。広島大のシミュレーターを使えるのは装置開発者にとって大変ありがたい。

C : TMT の第 1 期装置の IRIS の 3 モードのうちの一つを日本が中心になって進めようという動きがある。

C : よい前例になると思うので是非進めてほしい。

C : HSC, WFMOS に続く第 3 の装置のイメージがなかなか出てこない。赤外線広視野カメラをすばるにつける、という解もあるのか？

C : 赤外線広視野はやはりスペースだろう。JWST にはかなわない。それに WFMOS の次となると大分先の話になる。

C : すばるの機能として足りない部分はよその望遠鏡を使うと割り切ればよいが、装置開発をどう支えていくか、という意味でやはり 3 つ目の装置が必要なのではないか？

C : 東大や広島大で試験的な装置を製作中だが？

- C: そういう小さな装置がどこにあってどう進んでいるかをコミュニティに紹介するようなWSがあるとよい。
- C: 京都では望遠鏡に手一杯で装置まで手が回らない状況だ。大学レベルではすばるの装置は無理というのが実感だ。すばるを使って装置開発に携わる学生を育てるというのは難しいのではないか？期間がかかりすぎて（在学期間の）5年では解決しない。
- C: Kyoto3DII を AO188 と連携させようとしているので、是非サポートしてほしい。
- C: これまでは共同利用装置として皆が使えるものという発想だったが、状況が違って来たのではないか？
- C: 逆に特定の目的にしか使えない装置を作ったら、世界での競争に勝てると思う。それを encourage するのはどうか？
- C: 具体的にどういう方法で encourage するのか？
- C: データアーカイブしなくていいとか、SOSS につなげなくても可、と言ってもらえると楽だ。
- C: 共同利用装置と同じレベルでやる必要はないので、ケースバイケースの判断だろう。一方これまできちんと interface をやってきたのですばるが長持ちしているとも言えるが。

委員長総括：

下記の3点で現状を打開したい。

1. 小規模装置についてのWSでどんな装置計画が進行しているかを把握した上で、適切なサポートをする。
2. 大きな装置で何が実現可能か考えていく。
3. 他の望遠鏡の装置についてもWSを開催する。

委員の皆さん、1年半にわたってご苦勞様でした。特に二期4年間委員として活動していただいた皆さんには感謝しています。皆さんのおかげでSACの活動が広く認知され、軌道に乗せることができました。ありがとうございました。

=== 資料 =====

- 1 議題および次期 SAC 委員名簿
- 2 ASIAA との MOU 案
- 3 戦略枠提案 SEEDS に関する審査報告書案
- 4 Gemini との研究会開催に関する所長メール
- 5 第 14 回委員会議事録